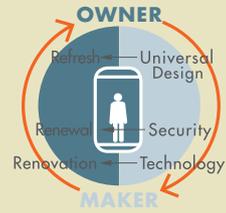


リニューアル探検隊が行く!



今号から始まった「リニューアル探検隊が行く!」安全で快適なエレベーターを探る」はエレベーターをリニューアルした施主の方々を訪ね、リニューアル前後で何がどう変わったのかを探る。第1回目は「お伊勢さん」で知られる伊勢神宮の入り口に位置する伝統ある小原産婦人科。37年間使ったエレベーターを一新し、患者さんにも喜ばれていると語る小原茂院長にお話を聞いた。

小原産婦人科



▲エレベーター・1階ホール
術後の患者さんを病室まで運ぶため、手術室の前にエレベーターが設置されている。

伊勢神宮外宮の入り口に当たるJR・近鉄伊勢市駅から歩いて5分もかからないところに小原産婦人科がある。開院70年を誇る地元で最も古い産院の一つであり、小原茂院長は3代目だ。

4階建て、病室は13室。淡いピンクを基調としたパステルカラーの明るい院内は我々探検隊もゆったりとした気分させてくれる。病室も広々としており、窓から神宮の森が見える産院として新聞で紹介されたこともある。

改築・改装と一緒にリニューアル

僕たちが
いろんなリニューアルを
紹介するよ!



リニューアル探検隊
隊長 篠崎 正彦
東洋大学工学部建築学科 助教授。
1968年東京都生まれ。専門分野は、建築計画と環境行動研究。特に、都市での生活様式と住居、施設の関係の研究している。現在、ベトナムにおける集合住宅の調査研究を進めている。

隊員
山田 花子
篠崎先生の研究室でベトナム建築を学ぶ。趣味はピアノとフルート。



3

▲エレベーター・3階ホール

病室へ向かう廊下の中央に設置されており、壁にあわせて明るいピンクで塗装されている。



2

▲エレベーター・かご室内部

病院・福祉施設向けの仕様のため、天井のライトが小さく、ストレッチャーがそのまま搬入できる奥行になっている。

内外観ともにさほど築年数が経っていないように見えるが、実は竣工が1969年。築37年になる。小原院長の決断で、95年から5回にわたり、改築・改装を続けてきた。改装に伴いグレーだった基調色をピンクに変え、玄関、ホール回りから次第に明るくなっていった。病室も当初の39室から3分の1に減らし、一室当たりの広さを倍増させた。

エレベーターも69年以来、35年間働き続け、かなりの疲れが見えていたが、改築・改装が優先でエレベーターのリニューアルまで手が届かなかった。

改築・改装の設計をすべて担当してきた一級建築士の中村泰矩氏(中村建築設計事務所所長)はこう語る。

「エレベーターは分娩室の前にあつて、主に分娩後の妊婦さんをストレッチャー(脚と車のついた担架)に乗せて病室に移動させるために使われていました」。

段差・振動・騒音のない快適さ

小原院長はエレベーターを使うたびに「これでは妊婦さんがかわいそうだ」と思うようになった。

何しろ旧式のため、操作盤のボタンを押してもなかなかドアが閉まらない。おそらく接触が悪かったのだろう。エレベーターが動き出すときも止まるときもガクンガクンと振動が起き、分娩後間もない妊婦の傷に障るのではないかと心配になった。

また、月に1回、エレベーターのフィールドエンジニアに調整をお願いしていたものの停止時に段差が生じ、ストレッチャーを乗せるとき、降ろすときに、妊婦にショックを与えてしまう。さらに、モーターとワイヤーから生じる騒音も気になった。そこで、小原院長はリニューアルを決意する。

「妊婦さんはもちろんのこと、お見舞いなど一般のみなさんにも使ってほしかったのです」と小原院長。こうして、2004年3月にリニューアル工事を始



小原 茂氏
小原産婦人科
院長



中村 泰矩氏
中村建築設計事務所
所長

篠崎隊長の
ここがポイント!



エレベーターのリニューアルで、 利用者のホスピタリティを高める

施 設設備のリニューアルは、エレベーターに限らず、単に老朽化したものを新しいものに取り替えるだけではありません。

一般的にリニューアル前のエレベーターは、施設の裏方にあるのですが、リニューアル後は少し建築空間の全面に出てくるケースが多いのです。それは、エレベーターを単に上下移動のハコと考えるのではなく、エレベーターに乗る行為そのものが楽しい体験になること、すなわち利用者のホスピタリティを重視するからです。

エレベーターは必ず人が通るところにあるので、エレベーターが変わると施設のイメージは大きく変わることになります。

たとえば今回のリニューアルのポイントの1つとなった色もそうです。小原院長指定でピンク色に変わりましたが、これでエレベーターの存在感が出てきますし、通路全体が明るくなります。また、エレベーターの安全の意識が高まる中、「停電時自動着床装置」や遠隔監視保守システムの「スーパー TERM」が装備され、安全の充実が図られたことは、このリニューアルの大きなポイントになっています。

建築の視点から見ると、エレベーター前の照明を変えると、エレベーターの存在がさらに増します。今後は、エレベーターにも金属的な素材だけでなく、自然素材を使って利用者に癒しをもたらすリニューアルの方向性も出てくるでしょう。

さらに産院ならではのアイデアとしては、エレベーター内のモニターに妊婦さんに役立つ情報などが、さりげなく表示されていると喜ばれるかもしれませんね。

新生児にとっては、人生の最初に乗るエレベーターなので、最新の機能や利便性だけでなく、人に優しい演出が重要になってくると思います（談）。



小原産婦人科

「自然なお産」「母乳保育」「明るく楽しく」が基本方針。年間約 230人の赤ちゃんが生まれ、親子何代も続けてお世話になっている人たちも少なくない。

■住所：三重県伊勢市宮後1-5-3

■URL：<http://www.a-space.ne.jp/ohara/>

め、18日間で準撤去リニューアルを完了。グレーのドアも院内に合わせて濃いピンク色に変わった。もう段差ができることもないし、振動も騒音もない。一般客も利用するようになり、お年寄りも見舞いに来やすくなった。

「新しいエレベーターの効果で見舞客も増えました。車いすをご利用のおじいちゃんが毎日、孫の顔を見に来るようになりました。これほど安全・快適になるとは思いませんでしたね。妊婦さんも喜んでいて、リニューアルして本当によかったですよ。感謝しています」。



メーカーの立場から…



東芝エレベーター株式会社

便利な24時間・365日の遠隔監視

エレベーターの寿命は平均25年前後

小原産婦人科のエレベーターのリニューアルを担当した東芝エレベーター中部支社に今回のリニューアルのポイント、一般的にはどのようなリニューアル方法があるのか、エレベーターの寿命は何年ほどか、リニューアルの工期はどの程度かなどについて聞いた。



原岡 勝則氏
中部支社
営業第二部
部長代理



山田 英史氏
中部支社
フィールドエンジニアリング部
工務工事技術グループ

小原産婦人科では、竣工以来35年間にわたってエレベーターをご利用いただいたが、東芝エレベーター中部支社の山田英史氏によると、老朽度は「それほど悪くなかった」という。

ストレッチャーを乗せる寝台用エレベーターということもあって、モーターも大型で頑丈な製品を使っており、年数ほどには老朽化していなかったようだ。妊婦搬送用として主に使っていたために、使用頻度がさほど多くなかったのかもしれない。

エレベーターの一般的な耐用年数について原岡勝則氏はこう答える。

「法的な減価償却資産の耐用年数は17年ですが、メンテナンスを行えばもっと寿命は長くなり、建築コストから考えると平均的に25年前後が寿命といえます」。

それぞれの装置そのものがまだ動くとしても、技術の進歩の速度が上がる中で、やはり20年以上前の製品と最新式では性能の差が著しい。エレベーターを動かすモーターを制御する仕組みも進化しており、現在ではコンピュータ制御で回転数をきめ細かくコントロールするため、なめらかに動き出し、停止し、段差は生じない。

リニューアルといっても、必ずすべてを取り替えるわけではない。東芝エレベーターでは3段階ある。

まず、前述のようにモーターや制御盤、エレベーター内の操作盤など心臓部だけを交換する「制御リニューアル」。次に残せる装置は残して必要なものだけを取り替える「準撤去リニューアル」。そして、すべてを交換する「全撤去リニューアル」。

小原産婦人科の場合、準撤去リニューアルとしてレールやのりばの枠・しきいなどは残したが、古い製品でもあり、他はすべて交換した。

原岡氏は「産院ということもあり、安全装置の充実を提案しました」という。

地震の本震(S波)を感知すると自動的に最寄階に着床・停止する「地震時管制運転」や、トラブル発生時に同じように最寄階に停止する「故障時最寄階自動着床運転」は標準装備されている。そこで、さらに「停電時自動着床装置」を提案した。これは停電になると専用バッテリーに切り替わり、停電灯が点灯し、自動アナウンスが流れて、最寄階に停止、ドアが開くシステムだ。

また、遠隔監視保守システム「スパーTERM」も併せて盛り込んだ。このシステムはエレベーターとサービスマン情報センターを電話回線で結び、運転状態を常時監視、異常を察知して未然に故障を防ぐ。

閉じ込めが発生しても、24時間・365日、エレベーター内からセンターに通話することができるので、利用者も安心だ。「毎月、利用状況のレポートも受け取れるので便利」と小原院長も語る。

上手な段取りで工期短縮

小原産婦人科では全撤去リニューアルに近い大がかりなリニューアルだったが、工期は18日間で済んだ。山田氏によれば通常、全撤去が3週間、準撤去が2週間、制御が3〜7日間かかる。工期短縮が可能になった理由として山田氏はこう語る。

「工事の段取りが工期を左右します。つまり、必要な部品や材料を工事する現場近くに置けるかどうか。ホール前、機械室などにそれぞれの場所にストックヤードを提供していただけないと工期の短縮は難しいですね。今回はホール前に仮囲いをする許可をいただき、そこに材料を置くことができたので、作業がしやすかったです」

ただし、入院中の妊婦もいるので工事の騒音には気を遣ったという。

「リニューアルが完成して、検査のために覆っていたシートを取る瞬間、施主のみなさんの多くは『オー』と驚きの声をお上げになるんですが、確か、小原先生もおっしゃったような気がします」と原岡氏は笑う。

生まれ変わったエレベーターが今日も妊婦さんや見舞客を運ぶ。